

永明延寿の禅淨融合思想

韓 京 洙

永明延寿は唐末五代の人であり、文益に続く、法眼宗第三祖に位置づけられるとともに『仏祖統紀』第二六巻の淨土立教志十二の一には慧遠―善導―承遠―法照―少康―延寿―省常と次第する淨土教の系譜、蓮社七祖の一人にも数えられている。今回私は彼の著作である『宗鏡錄』『万善同帰集』『智覚禪師自行録』そして二十余种を数える『伝記類』を通じて彼において淨土教思想がどのような形で禅の思想と融合されるにいったったかという問題を考察して見たいと思う。

まず『智覚禪師自行録』には彼が日課としていた百八の仏事が記録されているがこれによると、彼は毎日、『法華経』『般若心経』『華嚴経淨行品』等を誦誦し、十方仏、釈迦牟尼仏、阿弥陀仏、薬師琉璃光仏、諸菩薩を礼拝し讃嘆している。淨土教に関わる行については百八の仏事の中で十七があり、禅淨融合思想が入っている所は三ヶ所がある。この三ヶ所の中の一つの例をあげるならば「午時礼三帰依主安樂世界阿弥陀仏三普願一切法界衆生頓三悟自心三成三妙淨土。」(第二)

と禪師は阿弥陀仏と頓悟自心を融合させている。又、真言陀羅尼(阿弥陀如来真言 $\equiv$ om amita-teje hara hūm と同生淨土即ち廻向真言 $\equiv$ om smara yama-sāra maha cakra va hūm) を唱えることによってあらゆる罪業の障礙を断じ淨土に往生することを願っている(第九一)。又、『宗鏡錄』は彼の龐大な著述にしてそれは雪竇山の中峯庵にて書き始め、その完成は淨慈寺で成し遂げたといわれている。その著述の目的は当時の天台、華嚴、法相が互いに矛盾しているのでその点を補い三宗を一心によって綜合しようとした所にある。彼の伝記は『宋高僧伝』以外にも二十種類ほど見えるがその内容はほとんど同じである。そしてそれは禅中心の伝記、あるいは淨土中心の伝記、あるいは天台中心の伝記に分類できる。禅中心の伝記として代表的なものは『景德伝灯録』であり、淨土中心の伝記として代表的なものは『龍舒増広淨土文』である。

彼は三ヶ月の安居期間を長生不臥で通したほどに厳しい禅の修行者であった。そのような彼が淨土に帰依するようにな

った動機として伝記では次のように伝えている。即ち彼が国清寺の羅漢堂で「一心禪定」と「誦經万善莊嚴淨土」という二つの圖を作り、それを引いた結果「誦經万善莊嚴淨土」の圖を選びそれを以て淨土に帰依したのである。また、彼は修行のありさまについて『仏祖統紀』や『樂邦文類』には禪に關しては「指心為宗以悟為則。」と記し、淨土に關しては「日暮往別峯行道念仏。」と記しているが、しかし『廬山蓮宗寶鑑』では「朝供衆夜習禪。」として夜も習禪したと伝えている。即ち、『廬山蓮宗寶鑑』は延寿が淨土に帰依する根拠として次のような物語を伝えている。つまり、「前生において樵夫にすぎなかったある老人が虎にあつた時に「南無仏」を唱えたためにその功德によって出家の許しを得て阿羅漢果の境地を得た。」という『智度論』の記事を見て淨土に帰依したというものである。

次に延寿は世間の人に念仏を勧めるとき『永明道蹟』に「師念世間業苦衆生不能解脱云以念仏勸人同生淨土。」とあり、易行道の念仏門によつて宿業より脱し、往生することを勧めている。また、彼は当時の禪徒たちに対して「禪師日多見今之禪者不究如来之了義不知達磨之玄機空腹高心習為狂妄見修淨土則笑之曰彼學愚夫愚婦之所為何其鄙哉。」と批判しながら淨土を主張し、「於是永明知尚剖出心肝主張淨土既悟達磨直指之禪又能致身

於極樂上品。」というあるように淨土への帰依を主張している。また彼は『龍舒増廣淨土文』によると「但見性悟道便超生死何用繫念彼仏求生他方。」というある禪師の質問に對して「真修行人應自審察知如人飲水冷暖自知。」と答えたと伝えられており、馬鳴、龍樹、天台、慧忠などの歴代諸師の例を挙げながら往生の行の兼修を勧めている。これに對して禪の血脉譜として知られている『景德伝灯録』には「僧問如何是永明妙旨（略）師有偈曰欲識永明旨閉前一湖水日照光明生風來波浪起。」と學僧と延寿との禪問答を挙げながら延寿を法眼宗の嫡孫として位置付けている。

彼の禪思想は一般的に即心是仏思想・唯心思想、最正覺思想、見性思想、頓悟思想であると言われている。そこで衆善に帰すること、いいかえれば方法唯心を以て諸菩薩道を行ずることを説いた彼の末年の著作『万善同歸集』における彼の思想を見るならば、「一名理事無碍二名權実双行三名二諦並陳四名三性相融即五名体用自在六名空有相成七名正助兼修八名同異一際九名修性不二十名因果無差。」として理事無碍思想を根本とする十問、いうならば禪淨融合思想の根拠を提示している。このような理事無碍思想を取り入れさらに「若離事而推理墮声聞之愚若離理而行事同凡夫之執当知離理無事全是波離事無理全波是水。」といい、さらに慈愍三藏（六八〇—七四八）の影響を

受けているが、諸行にもとづく浄土往生の思想を著わしている。

彼に理即禪、事即浄土という禪浄融合思想を呼びかけている。さてこうした禪浄融合思想は彼の浄土観に投影するが、彼は唯心浄土と指方立相の浄土とを共に認めている。即ち彼は『万善同帰集』に「唯心仏土者了心方生（略）一切法皆唯心量（略）識心方生唯心浄土」（略）心外無法。」と述べて理として唯心浄土を主張し、また『上都儀』を引用し、さらに『宝積経』や『文殊般若经』を引用して「夫婦命三宝三者要指方立相住心取境不明無相離念也。」との高声念仏魔軍退散。」と「衆生愚鈍観不能解但聆念声相統自得往生仏国。」と述べ、また『那先比丘经』を引用し「如持二百枚大石置船上因船故不没人雖有本惡一時念仏不入泥黎中其小石没者如人作惡不知念仏便入泥黎中。」といいかえれば延寿は禪浄融合こそは、理事双修と解し、理としては唯心浄土を事はしては指方立想を彼の修行観に取り入れていたのである。つまり延寿にとって習禪即ち浄土念仏行であり、往生浄土即ち見性悟道であり、いわば行住坐臥、語黙動靜がそのまま習禪であり、念仏であつたのである。

以上のように延寿の著作を通じて彼の思想を考察してきたが、『景德伝灯録』において法眼宗の第三祖として伝承されたと共に一方では蓮社七祖の一人としても位置付けられた延

寿の伝承は彼が禪師として、また念仏者として理解されたことを物語るものであり、仏教史における延寿の位置付けの難しさを示していると言えよう。ともあれ、延寿は理事無碍の理念を禪浄双修の実践として完成せんとしたこと、そしてこのことは、延寿の思想の帰結であるところの『参禅念仏四料揅』にあるが如く「①有禪条浄土十人九蹉路陰境若現前警爾隨他去②無禪有浄土二万修万人去但得見弥陀伺愁不開悟③有禪有浄土猶如戴角虎現世為人師一來生作仏祖④無禪無浄土銅床並鐵柱万劫與三千生没箇人依怙」という四偈にも明らかであり、禪浄融合こそ理事双修への根本行と見た延寿の修行観を明すものであると思われる。要するに延寿は禪僧でありながら念仏僧であつたということができ、即ち習禪と念仏は彼においては同一の修行であり、これらに両道によつて彼は理事双修、禪浄融合の完成を旨指したと言えるのである。

- 1 『大正』四七卷一九四、a頁。
 - 2 『大正』四七卷三二五、a頁。
 - 3 『統藏』一四六卷四九二。上下頁。
 - 4 『浄全』六卷九〇七、下頁。
 - 5 『大正』五一卷四二一、c頁。
 - 6 『浄全』六卷七五五頁。
 - 7 『釈十七儀範』下編二九四編、安震湖編、吉永印刷社、昭和三十三年、大阪。
- △キーワード▽ 禪浄融合思想

（大正大学大学院）